

【校長室の窓】 R 2年 8月

「ほんとうの自分」を探すためには その2

川棚高等学校長 ^ 畑野 公昭

夏の日差しが強く降り注ぎ、青空に白亜の校舎が鮮やかに映える季節となりました。生徒の皆さんは、この8月、例年と異なり、臨時休業で欠けた分を取り戻すため、汗水を垂らしながら授業に勤しみつつ、来る体育祭や新人戦などに備えて、クラスメイトやチームメイトと準備を重ねる日々を送っていることと思います。

さて、前回「ほんとうの自分」を探すためには、自分の「ありのままの弱さ」に率直に向き合うことについて触れました。では、その「弱さ」の克服を図り「確かな自分」を探すためには、いったいどうすればいいのでしょうか。

「ありのままの弱さ」とは、若者にとっての「経験不足や思い込みからくる自信のなさ」と言えるでしょう。その弱さを克服するには、単純に裏返すと、「経験を積み、様々なことを知ること、自分の決断や判断、生き方に自信を持つこと」となります。では、ただ知識や経験を増やせば、よい判断や生き方ができるようになるのでしょうか。もちろん積み重ねた知識や経験が自然に結びついて、判断力を高めるもととなることはあるでしょう。しかし、目前で起こっていることや自分がしようとしていることについて、「なぜ?」「どういうこと?」「どうする?」といった「問い」がなければ、知識や経験を生かして答えを探るプロセスは生まれません。どういう「問い」を発するか…そこにこそ「ほんとうの自分」を探すカギがありそうです。

例えば、スポーツ選手が強靱な身体をつくるという志を立て、なぜ、どういう方法でトレーニングをするのかを考え、目標を少しずつ上げて負荷をかけていけば、おそらく目指す志またはその近くまで到達することは可能でしょう。また、その過程で様々な学びを取り入れ、努力を地道に積み上げる中で、謙虚さや精神的な強さ、そして自信を手に入れることもできるでしょう。その一連のプロセスの中で「ほんとうの自分」は育つと思います。ただプロテインをがぶ飲みするのはわけが違います。

学校での学習では、「なぜ」「どういうこと」という問いはあらかじめ与えられていることが多いですが、これは「問いに対する答」に迫るトレーニングの一コマです。大事なことは、答えを考える過程の中で、さらに自分で問いを発することができるようになることです。学習に限らず、あらゆる場面で「問いを発する自分」を見いだすことで、「ほんとうの自分」をつかんでください。

この4月から講師として赴任されていた中村和樹先生が、8月2日に病のため急逝されました。25歳という若さで冥府に旅立たれたことは残念でなりません。謹んでご冥福をお祈りいたします。